

## 市来鶴丸城跡発掘調査概要

枝元泰生・常田和彦

## 1 はじめに

東市来町教育委員会では平成10年度に、市来鶴丸城跡の整備計画を立ち上げ、平成15年度に対象地域の買収がなされた。これに伴い、対象地域の遺跡の範囲と性格を把握するため、平成16年8月16日から10月15日まで、確認調査を東市来町教育委員会が実施した。

平成17年5月1日に東市来町・伊集院町・日吉町・吹上町が合併し日置市が誕生。日置市教育委員会は平成17年10月3日から17日まで、昨年を引き続いて確認調査を行った。

## 2 市来鶴丸城跡の概要

市来鶴丸城は日置市東市来町長里地区の鶴丸小学校の裏に位置している。市来鶴丸城は13世紀初頭に市来家房により造られたとされている。市来氏は、平安時代の後半期から、島津荘寄郡であった市来院の院司であったと伝えられている。中世には市来城、もしくは市来本城と呼ばれていたらしいが、現在、地元では「鶴丸城」と呼ばれることが多い。教育委員会では、鹿児島市の鶴丸城（鹿児島城）と区別するため、「市来鶴丸城跡」の名称を用いている。海岸から3キロ入った標高約100メートルを頂点にしたシラス台地上に築かれている。複数の曲輪と空堀で構成されており、周囲3キロメートル、山頂は階段状の平地で40アール程の面積である。城の周囲は絶壁で、南側に江口川が流れ、堅固な城であったと思われる。周囲にも複数の山城が構築されている。鶴丸城跡頂上の本丸跡と思われる個所は、西側に土塁が残っている。

## 3 市来鶴丸城の歴史

市来鶴丸城が記録に現れるのは南北朝時代からである。市来氏は南朝につき、市来鶴丸城や各地で戦った。この戦いはしばらく続いたが、興国元(1340)年に北朝方であった守護島津貞久に市来鶴丸城を攻められ、降伏したが、城は引き続き市来氏が領有を続けた。

室町時代、市来久家は守護島津忠国と対立するようになる。寛正3(1462)年、久家は忠国の子立久に攻められ、市来鶴丸城は落城、市来氏は滅亡した。それ以後、市来鶴丸城は守護の直轄になったとおもわれる。

戦国時代の後半期に、島津貴久と島津実久による守護の座をめぐる争いがおきた。当初は実久が優勢であったが、次第に貴久が反撃に移り、立場が逆転していった。天文8(1539)年、貴久は実久方の新納忠苗が守る市来鶴丸城を攻めた。忠苗は60日間余り善戦したが、ついに降伏した。これが実久方の最後の抵抗になり、貴久は薩摩半島における最大の勢力となった。

永禄4(1561)年に市来鶴丸城を訪れた修道士ルイス・アルメイダは、その時のことを書簡に残している(註1)。それによると、11年前の天文19(1550)年9月に鹿児島に来日したフランシスコ・ザビエルが、市来鶴丸城を訪れ、17名が洗礼を受け、天文19年には信者が70名余りに達していたと記録している。

アルメイダは市来鶴丸城に関する記述も残している。「それはおよそ十の砦に分かれた一つの山であり、各砦はことごとく鶴嘴で作られ互いに遠く離れ、相当に深い濠を備えている」「これらの砦の中央に主たる城があり、ここに鹿児島国主の家臣である城主がいる。」等の記



图1 市来鶴丸城跡位置图

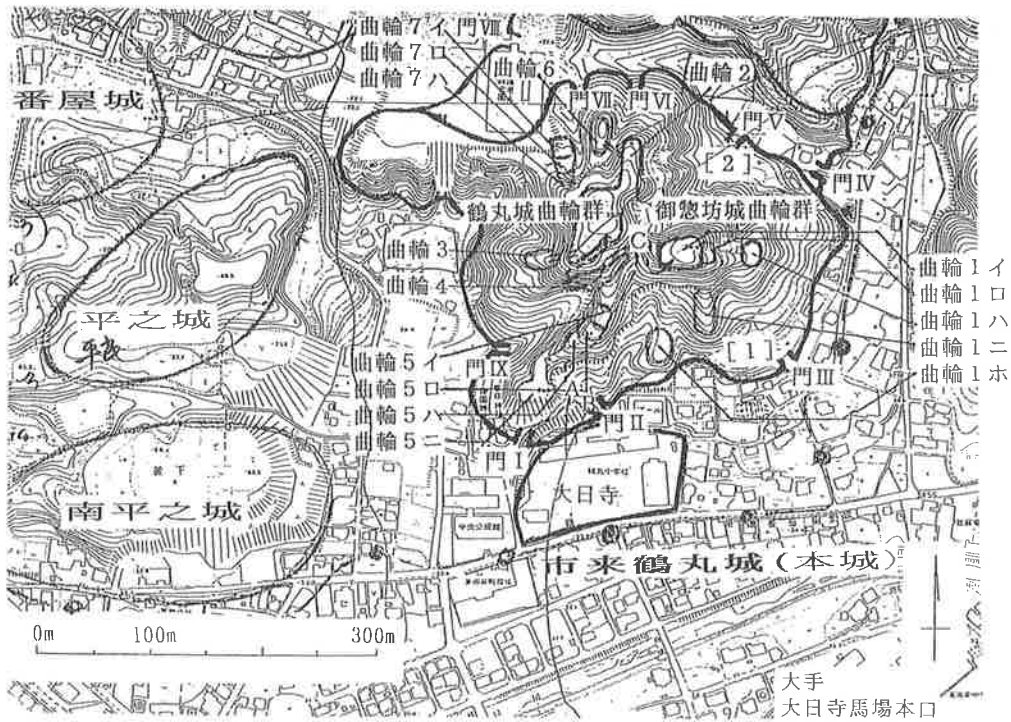


图2 市来鶴丸城跡縄張图

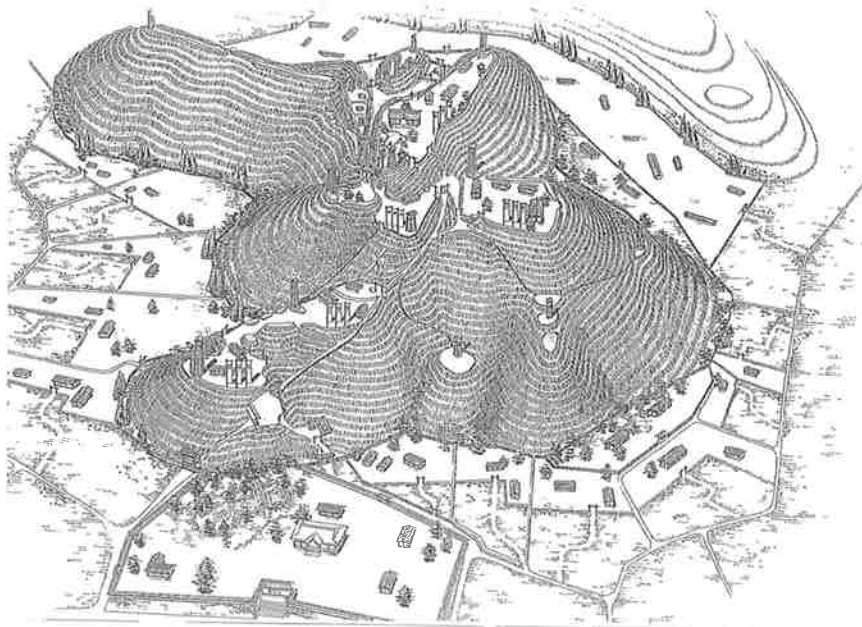


图3 市来鶴丸城跡想像復元图

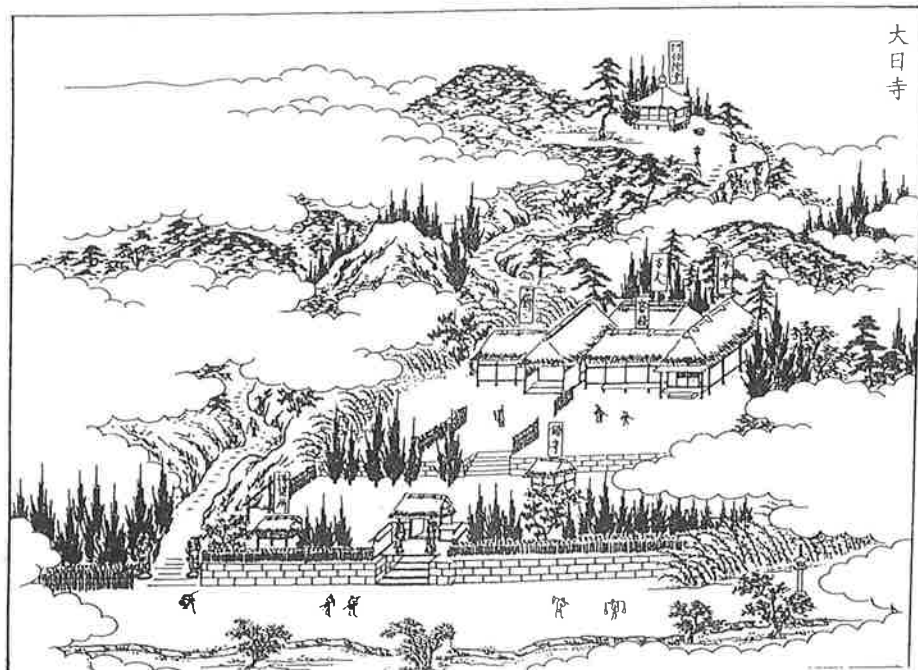


図4 「三国名勝図会」より



図5 曲輪2・3調査略図



写真1 曲輪2 建物跡検出状況



写真2 曲輪3 建物跡検出状況

述があり、当時の山城の様子が伺える貴重な記録である。

近世になると、現在の鶴丸小学校を中心とした所に大日寺が造られた。『三国名勝図会』(1843)に大日寺の記述があり、大日寺の阿弥陀堂が鶴丸城本丸とおもわれる場所に建立されている絵が掲載されている。

#### 4 調査の概要

平成16年の調査は、本丸跡と推定される曲輪2に任意に9基のトレンチを設定し、調査を行った。曲輪2は標高100mほどで、市来鶴丸城の頂上にある。

トレンチとは別に、礎石らしき石が露出していた箇所を精査したところ、礎石建物跡が検出された。建物跡の規模は3間×3間(1辺5.4m)で総柱の建物である。入口は東向きで、切石が前面にあり、廂を支える角柱を立てるためとおもわれる穴が開けてある。建物跡は切り出しによって造成された高さ2~30cmほどの壇に構築されている。礎石は直径50~60cmほどの安山岩・凝灰岩である。この建物跡は、その構造などから『三国名勝図会』に記載されている大日寺の阿弥陀堂である可能性が高い。

曲輪3でも同じ経緯で礎石をもつ建物跡が検出された。曲輪3は、曲輪2の西側で空堀を挟んで構築されている。建物跡は、曲輪2と似た構造の3間×2間であるが、壇は確認されていない。

曲輪2では、他に、石を列状に並べたものが2基、溝状遺構が1基、炉跡とおもわれる焼土が5ヶ所、ピットなどが発見された。

遺物は龍泉窯系青磁、土師質土器(灯明皿が多い)、染付、陶器、鏝、瓦質土器、古銭(洪武通宝、寛永通宝)などが出土した。

平成17年の調査では、曲輪2・4・5に任意に5基のトレンチを設定し、調査を行った。また、曲輪2と3の間の空堀にトレンチを2箇所設定し、調査した。

曲輪2では、16年度に調査しなかった北側の尾根の部分に3基のトレンチを設定し調査したが、大きな石や土師器片、などがわずかに出土しただけであった。本丸下の曲輪4・5の調査でも同様であったが、曲輪5からは近世の

ものとおもわれる瓦が数点出土し、大日寺の利用が広域に亘る可能性がでてきた。

#### 5 おわりに

今回の調査の大きな成果は曲輪2・3で検出された礎石建物跡である。近世の寺院跡だとしても、寺院跡がこれほど良好な形で出土することは、鹿児島ではめずらしいことであろう。

今回調査した範囲は、現存する土塁や空堀、中世の遺物から山城であったことは確実である。しかし、近世になっても寺院として積極的に利用されており、遺構の時期が中世か近世かは判断が難しい。今後も詳細な検討が必要である。

【註1】 監訳 松田毅一『十六・十七世紀  
イエズス会日本報告集 第Ⅲ期第2巻』  
同朋社 1998

#### 【参考文献】

『東市来町郷土史』東市来教育委員1988  
三木靖『戦国史叢書10 薩摩島津氏』新人物往来社  
1972  
『日本歴史地名体系第四七巻 鹿児島県の地名』平凡社  
1988

### 機 関 誌 4 号 原 稿 募 集

<仕様>

1. A4判 縦書き 本文10.5歩
2. 1頁1行33字×26行×上下2段組  
=1,716字(四百字原稿用紙4.3枚)

<目次>

1. 論文 400字×50枚程度(図版註含)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版註含)
3. 史料紹介 400字×5~20枚程度
4. 城郭関連文献一覧
5. 図書紹介・書評
6. わが町のお城拝見

※原稿提出は、印刷原稿とフロッピーをご一緒に提出ください。

\*送付先 〒895-0072

鹿児島県薩摩川内市中郷二丁目2番6号  
薩摩川内市歴史資料館気付 吉本 明弘

## 旧鹿児島市域の中世城郭の現況

古澤 生

### はじめに

鹿児島市立ふるさと考古歴史館では、平成13年1月5日から3月4日まで企画展「ふるさと古城めぐり－鹿児島市内の城跡を訪ねて－」を開催した。その展示に先立って、中世城跡の現状を確認し、パネル用の写真を撮影するため、現況調査を行った。

しかし、現況といっても、5年前の状態であるので、現在の状況を反映しているかどうかは、自信がない。したがって、ここに記してあるものは、平成12年12月ごろの現況と理解していただきたい。以下、鹿児島市内の主な城跡について、状況を述べてみたいと思う。

ここでは、平成16年11月の合併以前の旧鹿児島市内の城跡に限定している。新しく市に加わった、旧郡山町、旧吉田町、旧桜島町、旧松元町、旧喜入町の各地区にも城跡は、多数存在するが、現在整理中であるので、別の機会に譲りたい。

### 比志島城

市内北西部、皆与志町に所在する。周辺は、田地となっている。三方を田に囲まれた台地上に城はある。道路から北に入って、射場跡は、ドラム缶など資材置き場となっていて、城東側の大手口と思われる部分は、はっきりと確認できた。そこから西へ通路兼空堀のような場所を通って、二の丸と思われる部分に出る。二の丸への入り口は、「虎口」と推定される場所である。西北側がはっきりと壁になっていて、その様子が残っていた。二の丸は広く畑として利用されていた。井戸も確認できたが、農業用水として利用されているようだった。資料では、南側に土塁があることになっていたが、若干の土の盛り上がりは、確認できたが、はっきりとしなかった。

そこから、西側へ本丸、空堀、土塁、土橋、

搦手と続いているが、かなり藪になっていて、踏み込めなかった。しかしながら、人手による耕作や開発等の痕跡はなく、縄張りが残っている様子が看取出来た。

いったん引き返し、南側へ回る農道から、再度、土橋等を確認しようとしたが、やはり、藪で踏み込めなかった。藪を払い確認踏査を行えば、城跡の縄張りが良好に保存されていることがわかると思う。

### 小山田城

市内北西部旧郡山町との境付近に所在する。明瞭な部分としては、国道3号線の道路部分が、ちょうど切り通しの空堀になっている。国道から北側へ回り込む側道部分は、平城とされている。そこから南側へ上がった部分が高城の字が残っている場所である。館跡とされる上まで上がってみたが、はっきりと城跡がわかる場所は、残念ながら、見つけれなかった。一方、平城から北側は絶壁となっていて天然の要害である。その高低差を利用して、水力発電が行われている。発電施設付近に岩を切り通した大きな空堀とされる部分も確認できた。

### 川上城

九州縦貫道鹿児島料金所付近の道路を挟んで両側に広がっている。地形をダイナミックに活用した規模の大きい城である。三の丸とされる小高い部分の横に小さな道が切っていて、現在保育園となっている二の丸部分を確認したが、土塁などは良くわからなかった。二の丸・三の丸部分は、やや小規模な感じがあるが、本丸方面は、その間に空堀として利用したと思われる大きな谷があり、また上には大きな平坦地があり、大規模な城を彷彿とさせる。

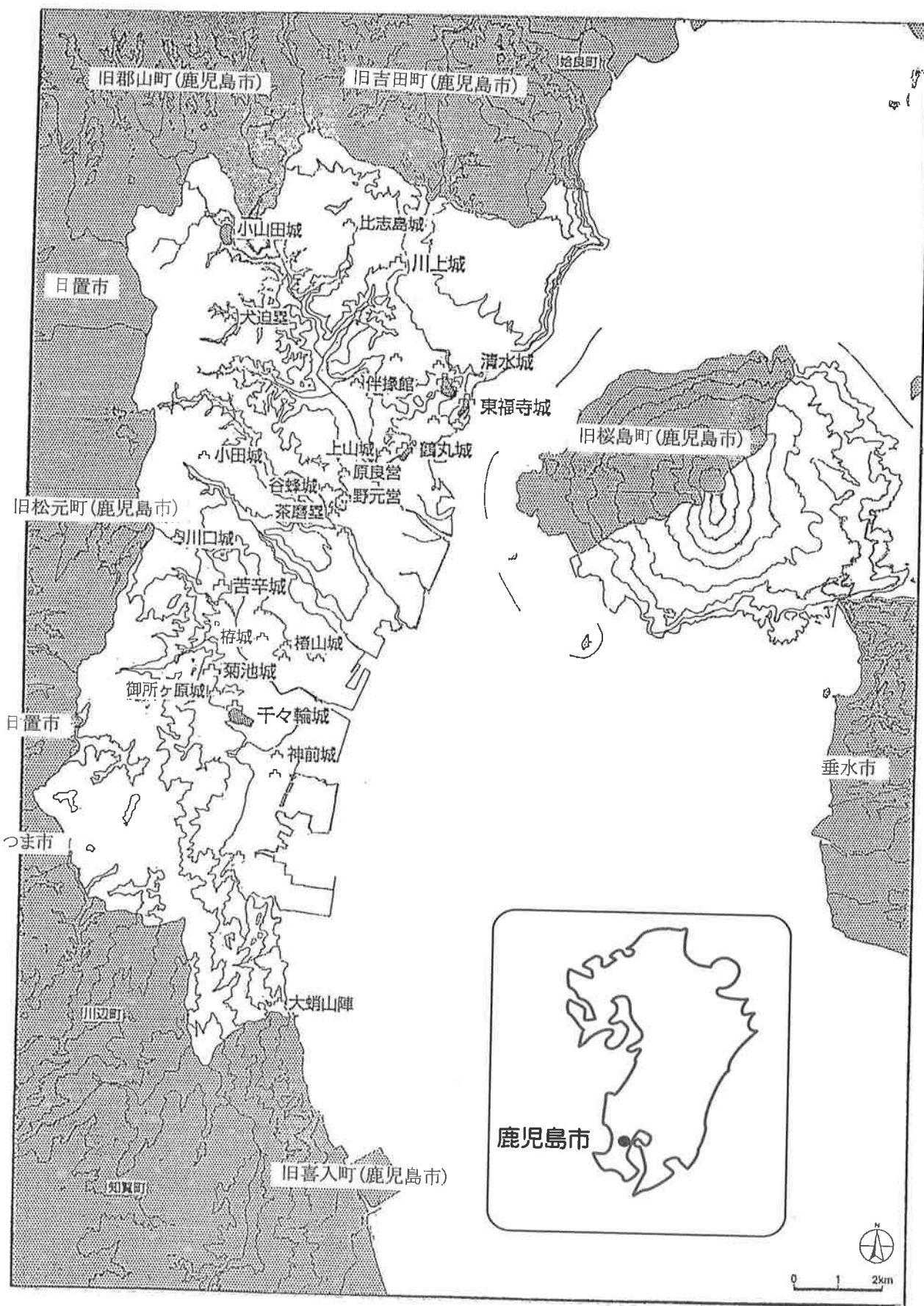


图1 旧鹿兒島市主要中世城郭位置图

表1 旧鹿児島市内の中世城跡一覧

※平成16年11月の合併前の状況

城名	所在地	時代	別名
比志島城	皆与志町字古屋敷	鎌倉・南北朝・室町	
小山田城	小山田町字城山	南北朝	
川上城	川上町字加栗山	南北朝・戦国	
犬迫塁	犬迫町字仮屋	南北朝～室町	
東福寺城	清水町字田ノ浦	平安・鎌倉・南北朝	
浜崎城	清水町字田ノ浦	南北朝	
清水城	坂元町字稲荷ノ上	室町～戦国	鹿児島本城
尾頸小城	稲荷町字後迫	中世	
内城	大竜町字内ノ丸	戦国、安土・桃山	御内
催馬楽城	坂元町字城ノ上	南北朝	
橋ノ口城	坂元町字城の後	中世	
伴掾館	下伊敷町天神城	平安・鎌倉・南北朝	
鶴丸城	城山町字堀ノ面	江戸	
上山城	新照院町41番1号	南北朝・室町	
夏蔭城	長田町字夏影	南北朝	夏影城
原良営	原良町字源六ヶ入口	南北朝・室町	
谷峰城	常磐町字二ノ迫	南北朝	
茶磨塁	武3丁目字三重尾崎	南北朝	
野元営	武3丁目字城本	南北朝	
唐湊城	田上町字内城	南北朝	
小田城	西別府町字小田城		
川口城	五ヶ別府町川口字陣ヶ岡	室町	
苦辛城	山田町字内城皇徳寺団地	鎌倉後期～室町初期	
椿山城	上福元町字椿山	室町	
城ヶ原城	上福元町字城ヶ原	室町	
波ノ平城	上福元町字波ノ平	南北朝	
柵城	中山町字柵城	室町	
辺田城	中山町字辺田中山小学校	室町	
菊池城	上福元町見寄御所原東北	南北朝	
御所ヶ原城	上福元町後迫御所原(南部斎場)	南北朝	
陣之尾城	下福元町字本城の西	南北朝～戦国	
弓場城	下福元町字本城	南北朝～戦国	
谷山本城	下福元町字本城1282番地	南北朝～戦国	千々輪城
神前城	和田町字和田名	戦国	玉林城
宇宿城	下福元町字宇宿城	戦国	
茶臼城	下福元町慈眼寺	中世	
堀之内城	下福元町影原字堀之内	中世	
大蛸山陣	平川町字蛸山	戦国	

## 犬迫壘

市内北西部犬迫町おはら仕出しセンターの向かいの山上に所在する。地元の方のお話によると以前は付近で古石塔などが見つかったことがあるとのことであった。頂上部分の空堀の跡らしき部分は、かろうじて確認できた。後は、斜面の補強工事や削平の跡などで、壊されているようだった。

## 東福寺城

多賀山公園に所在する。南側の神社の部分が浜崎城といわれている。城址の石碑と「肝付兼重奮戦の碑」以外は、跡を記念したものは見つけられない。空堀とされる切りとおしの部分があるが、両側の壁をコンクリートで固めているため、地形以外ではそれとわからない。海に突き出した形の防御には適したもののなので、南朝方の激しい攻撃にも耐えたことも納得できると感じた。

## 清水城

清水中学校に所在する。館部分がちょうど中学校の敷地とされ、その上の部分が山城とされている。中学校からの上がり口などを観察してみたが、はっきりとした跡などは確認できなかった。中学校の前、稲荷川を渡った先が、微高地になっているが、ここが尾頸小城と思われる。台地の山裾に館があり、その前面に出城があって、背後の台地上に山城施設を持つこの清水城は、典型的な中世城館の特徴を持ち、この時期の完成されたスタイルといえる。この時期城下町が形成されて、鹿児島市の町の基礎ができていくことももっともなことだと痛感した。

## 内城

大龍小学校に所在する。ここも城址部分がちょうど小学校の敷地といわれている。珍しい平城の城館である。しかし、城が鶴丸城へ移った後、大龍寺があったため、中世城時代の遺構などは、現在はほとんどわからない。

当時のものとされる手洗い鉢と庭石だけ確認できた。

## 催馬楽城

坂元小学校付近に所在するとされているが、団地造成、小中学校造成でほとんど当時の面影はわからない。学校の脇に「南朝之忠臣矢上高純公居城址」の石碑は確認できた。

## 谷峰城

市内中心部常磐町の武岡台台地への上っていく谷部に所在する。桃ヶ岡公園へと上がっていく山道が空堀兼通路といわれている。それ以上のことは、確認できなかった。

## 小田城

市内西部西別府町に所在する。すぐ脇を南九州自動車道が走っている。鹿児島実業高校のある大嶺団地の裏手くらいの場所である。大手口と思われる場所から堀切を通過して山頂へ抜ける道は、よくわからなかった。代わりに南側の最近、自動車道工事に伴い、壁を作った側に鉄階段があったので、そちらから登った。山頂の本丸跡には、頂上より少し下りた場所に山を一周するように空堀跡がきれいな形で確認できた。かなり良好に跡が確認できたのは、この部分については、道路工事の影響を受けなかったためと思われる。

## 陣之尾城

市内南部谷山下福元町本城に所在する。後述する谷山本城（千々輪城）の後ろ備えの城である。石碑が建てられているというので探してみたがすぐには見当たらなかった。山頂付近をずいぶん歩いたところで、つたなどに覆われた石碑を発見した。石碑は表側に「陣之尾城址」とあり、裏に城の由緒などが刻まれていた。最初に見つけたときは、写真撮影だけであったが後日、石碑の拓本作成に再度行った。城址自体の遺構などは、まったく確認できなかったが、本城の背後に谷を挟んで

(表)

## 陣之尾城址

従四位勲三等 伊地知四郎 謹書

(裏)

延元元年九月後醍醐天皇ノ皇子懐良親王征西將軍ニ任セラル当時国内擾乱セリ親王勅命ヲ奉シテ薩摩ニ入国アラセラルルヤ忠節勤王ノ士贈正五位谷山郡司谷山五郎隆信是ヲ千々輪城ニ迎ヘ奉ル時興國三年五月ナリ錦旗城頭高ク翻リ外城陣之尾ニハ精兵充滿シテ親王ヲ護衛シ奉リ為ニ官方ノ勢大ニ振ヘリ親王後ニ御所ヶ原ニ征西府ヲ置キ九州ニ号令セラレ初メテ薩隅日三州鎮定セリ星霜コニコニ六百年実ニ由緒ノ地ナリ即チ碑ヲ建テ城址ヲ顯彰スル所以也

昭和三十三年三月吉日 従七位

安田敬蔵

謹撰

谷山町郷土史研究会代表者

黒木彌之進

建之

の山であることから、谷山本城のウィークポイントであることは、容易に想像がついた。

### 谷山本城

陣之尾城と同様に市内南部谷山下福元町本城に所在する。谷山地域の水田地帯に突き出した形の舌状台地にある。北側、大手口から通路兼空堀のところを通過して、山頂へ上がると平坦になったところがあり、ここが本丸跡である。この端の部分、三分の二くらいが土塁に囲まれている。市内の山城の中では、格段に遺構の保存がよいと思われる。西側は、板落として呼ばれる切り通しによって、陣之尾城と隔てられている。大手口の反対側、南には虎口があるが、ここへの通路は、斜面がきつくと、谷の空堀のようになっている。陣之尾城と本丸との間に弓場城があるとされるが、間を走っている県道の工事の際、壊されたと見られ、はっきりとしなかった。

### 神前城

市内南部谷山和田町に所在する。県道を挟んで北側に玉林城、南側に宇宿城があるとされる。玉林城は、伊佐智佐神社の境内などがその場所と思われるが、境内隅に石碑が残っているほかは、遺構など確認できなかった。反対側の宇宿城も最も高いところまで登ってみたが、よくわからなかった。ちょうど県道の部分や神社の北側のところが地形的に切り立っているため、こういった部分を利用して、山城を造成したのではないかと想像する。

### まとめ

市内随所にある城址を概観してきたが、遺構などの保存状態が良好なところは、道路や住宅造成などの難を逃れたところであった。比志島城や小田城、谷山本城など址をしのべる場所も残っていた。

### 陣之尾城址碑文書き下し

鹿児島市内の中世城の特徴として、平野部に突き出した舌状台地に築かれる場合が多いよう思った。その周辺は、現在は住宅地となっているところでも、かつては、水田であり水田に水を張れば、水堀と同じようなものになると想像できる。そして、そんな場合、後背の尾根筋が守備の上で最も危険であるため、後備えの出城を配置する。このようなパターンだったのか。地形の特徴を最大限に生かしていた、そんな気がする。

鹿児島の町のルーツも中世の城下町に始まるといえる。欲をいえば、館の跡などの遺構が見つかってくればと期待する。

### 【参考文献】

鹿児島市教育委員会編『鹿児島市文化財調査報告書 (6) 鹿児島市中世城館跡』1989、鹿児島市教育委員会編『鹿児島市遺跡分布図』埋蔵文化財包蔵地図 2002

### ●第23回 全国城郭研究者セミナーのご案内

テーマ：城館の分布から何がわかるか  
日時：平成18年8月5・6日(土・日)  
会場：京都府木津町中央交流会館<見学：鹿背山城>  
<主催>・中世城郭研究会・城郭談話会  
・木津の文化財と緑を守る会

# ◇第25回 南九州城郭談話会見学会報告・宮崎県木城町高城城跡◇

出口 浩 二

## はじめに

宮崎県児湯郡木城町にある高城城跡は、天正6年(1578)と天正15年(1587)の2度にわたる島津氏と大友氏の戦いで、戦場になった城として知られている。天正6年は第1次高城合戦で島津勢が圧勝、耳川の戦いとして知られている。島津氏は大友氏を追い九州の大半を席捲した。

9年後の天正15年、第2次高城合戦は島津氏と秀吉軍との戦いとなり、垠白坂の決戦で島津氏は敗退、以後本拠地鹿児島に蟄居することとなる。

この島津氏16世紀後半の勃興と衰退の契機となった高城およびその周辺の小丸川一帯の史跡見学については2年ほど前から、木城町教育委員会と打ち合わせがなされていたが、諸般の事情が重なって何度か中止や延期となっていたものである。今回、本城町教育委員会で主催する、高城合戦歴史講演会において、三木 靖会長が講演をするのに合わせて、城郭談話会見学会をセットする形で開催する運びとなったものである。



写真1 講演会 三木 靖会長

## 1. 平成18年2月25日(土) 講演会

木城町農業者トレーニングセンターで13時30分から16時30分まで、ほぼ3時間行われた。会場の座席は200を越えていたが、ほぼ満席の大盛況で、場内には熱気があふれていた。

中学生による民俗芸能の下鶴白太鼓の披露のあと、木城町教育委員会の白岩 修氏が「高城城跡の調査の歩み」として、発掘調査の成果をまじえながら、高城城跡の整備保存の状況を説明した。

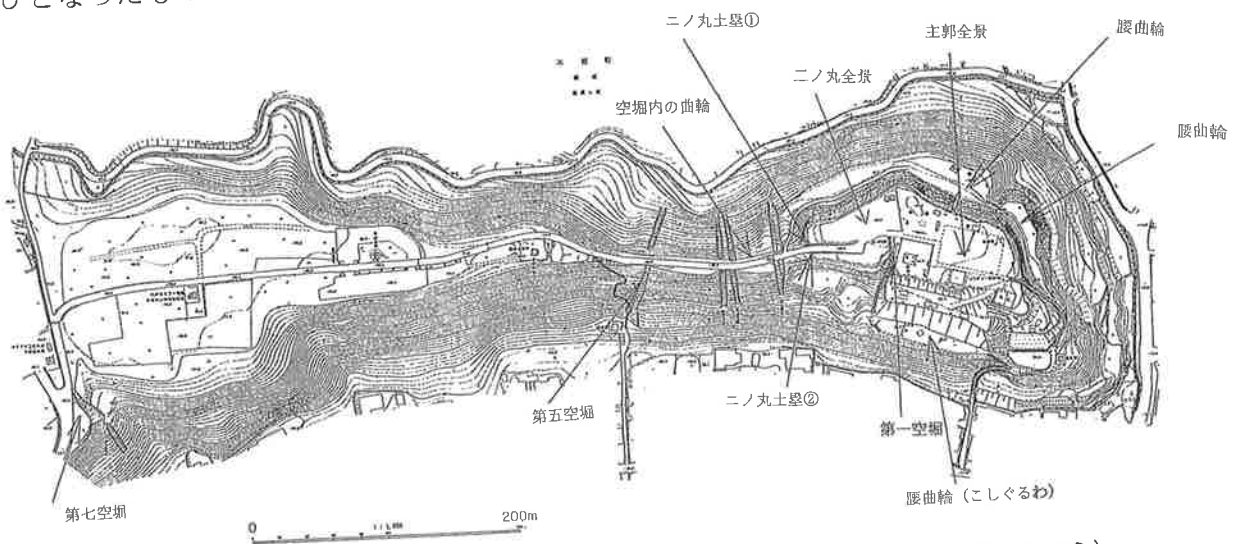


図1 宮崎県児湯郡木城町 高城城跡地形図 (白岩 修・講演会事例報告レジュメから)



写真2 宗麟原供養塔の見学 説明は島岡氏

そのあと「島津氏からみた高城合戦」として、三木会長が映像や豊富な資料を駆使して第1次・第2次の高城合戦の状況を説明された。島津軍の釣り野伏せ・根白坂の夜襲戦、難攻不落の高城等、戦場となった地域であるだけに臨場感があって、迫力にあふれた講演であった。根白坂の敗戦を予見し、それを島津家存続のため戦略的に利用する義久のしたたかな作戦ぶりを聞いて、さすが！と感銘を受けてしまった。会場から手の届くような目の前に高城城跡が迫っているために、話に緊迫感がある。

## 2. 2月26日(日) 雨のち曇り 見学会

朝は激しい雨であったが、次第に小降りとなり8時40分本城町役場に集合・案内説明のころは止んで大いに助かった。

木城町文化財保護調査員の山内先生や椎さんそれに白岩さんと宮崎県埋文センターの福田さんが地元側の案内役となり、鹿児島からの三木会長を含めて12名が従った。以下、見学コースに添って概要をまとめたい。

○高城城跡(町指定) 小丸川の左側にあり標高約60m、東西に長い丘陵の東端に主郭がある。主郭から西方へ縦に空堀が7本確認されている。島津軍の山田新助有信が守将として固めて、戦で陥ちたことはなかったという。

この主郭部からの展望はアッ！と息を飲むすばらしさで、小丸川を中心とする木城町の町並みや、南側の台地とその向うの山々がパノラマのように展開していた。主郭の中央にメロディー館が建ち町の人々に心優しい童謡をかなでていた。雨あがり効いている。

○宗麟原供養塔(国指定史跡) 高城城跡の北東、川南町にある。第1次高城合戦の戦死者を敵味方の区別なく供養するために島津義久が建立した。平成14年に覆屋改築に伴う確認調査が実施され、その内容を調査担当の島岡氏が詳細に説明された。供養塚の外縁に24m四方の板塀が巡り、南面には外縁12mの「祭場」空間が確認されたとのこと。

○松山之陣-惣陣- 供養塔から南へ2~300mの所、大友宗麟が高城攻撃のため本陣とした。第2次高城合戦では豊臣秀長の軍が改築したともいわれる。空堀・土塁・曲輪が残存していた。

○根白坂陣跡 小丸川の右岸の台地状の所にあった。広々とした畑地が広がっていた。陣跡と思われる遺構は不明らしい。島津軍はここで敗退するが、義久はこの機をのがさず秀吉に降伏したという。後手の先であろう。

このあと高鍋町へ移動し、舞鶴城内の歴史資料館を見学、さらに舞鶴城(高鍋城)に入り曲輪と土塁等を確認、15時20分解散となった。密度の濃い充実した見学会であった。



写真3 小丸川右岸の丘陵北縁にて

# 喜入地域の山城について

永野達郎

## 1 はじめに

喜入地域(旧喜入町)は、南北の長さ16km、東西の長さ6.2kmで、東側は、錦江湾に面し、西は、南北に連なる南薩山地を境として知覧町と接している。したがって、中世の山城は、南薩山地から伸びた丘陵か、もしくは、海岸沿いの独立した台地上に立地している。いずれも、河川の浸食によって残されたシラス(始良カルデラ噴出物)を基盤土としている。

記録に残る山城は、喜入の位置図(図1)に示すとおり、北から、中名の城ヶ野(上ノ城)、喜入の愛宕城、琵琶山城、上籠城、給黎城、前之浜の網屋城、生見の米倉城となる。

なお、給黎(きいれ)は、万寿年間(1024~1028)に、関白藤原頼道の荘園となり、伊作平次郎良道の二男有道が初めて、給黎氏を名乗ったが、この有道が居館をどこにしたかは必ずしもはっきりはしていない。ただ、確実な資料は存在しないが、生見地域の米倉周辺ではなかったかと推測されている。米倉から西南の台地の帖地遺跡からは、室町期の磁器も出土している。

さらに、時代を経て、喜入の上籠城周辺(現喜入中から南の東西に細長く延びた丘陵地)に移り、さらに南北朝から戦国時代にかけての軍事的緊張関係から、より防備の強固な給黎城に家臣団とともに居住が移され、さらに、江戸時代にはいると、給黎城周辺が手狭となったため、承応二年(1653年)に肝付氏の第四代兼屋によって琵琶山城(註1)を後背地とした地に仮屋(現喜入小学校)が移されている。

そこで、喜入では、給黎城周辺を旧麓(もとふもと)、仮屋周辺を麓(ふもと)と呼びそれぞれ集落名として名をとどめている。

なお、鹿児島城下の肝付屋敷は、現在の、

鹿児島市民福祉プラザ付近にあった。

## 2 給黎城について

給黎城は、同じ段丘より派生した三つの半島状台地を利用し、東西方向に伸びた台地を北之城、南ヶ城と呼び、中央が本城となっており(図2)、北側の中腹は、腰郭とされ、土地の人に馬乗り馬場と称されている。(註2)

この給黎城は、応永十八年(1411)に、島津の一族である伊集院頼久が、島津元久から給黎郡を領地として与えられ、頼久は給黎城を居城としている。

その後、守護の島津氏に反感を持つ、国方の領主が、伊集院頼久を盟主として結集し、世にこれを『国一揆』と称する事態に至った。

そこで、応永二十一年(1414)の七月から八月にかけて、伊集院頼久軍と、島津久豊軍との間で、給黎城の攻防を巡って、烈しい戦闘が繰り広げられた。八月六日の戦闘で一旦は、敗北して引き上げた島津久豊の軍勢が、瀬々串の海岸付近で球磨の相良前継の援軍を得て、引き返し(現在、その地は駒返しと呼ばれている)、油断していたところを大軍で攻めたため給黎城は陥落した。この結果、その後もしばらくは、国方衆の抵抗は続いたものの、やがて多くの国方衆が島津氏の家臣団に組み込まれていくことになった。

島津氏にとって、給黎城の攻防に勝利したことは守護大名として、薩摩国支配の実権を握る上で大きな意味のある戦いであったといえる。この戦勝を祝して、島津久豊によって給黎を喜入(きいれ)と改めたのである。

また、この給黎城の周辺は、この時の戦闘を物語る字名が多く残されている。何万ヶ宇都(ナンマンガウト)、強敵平良(ゴテビラ)、

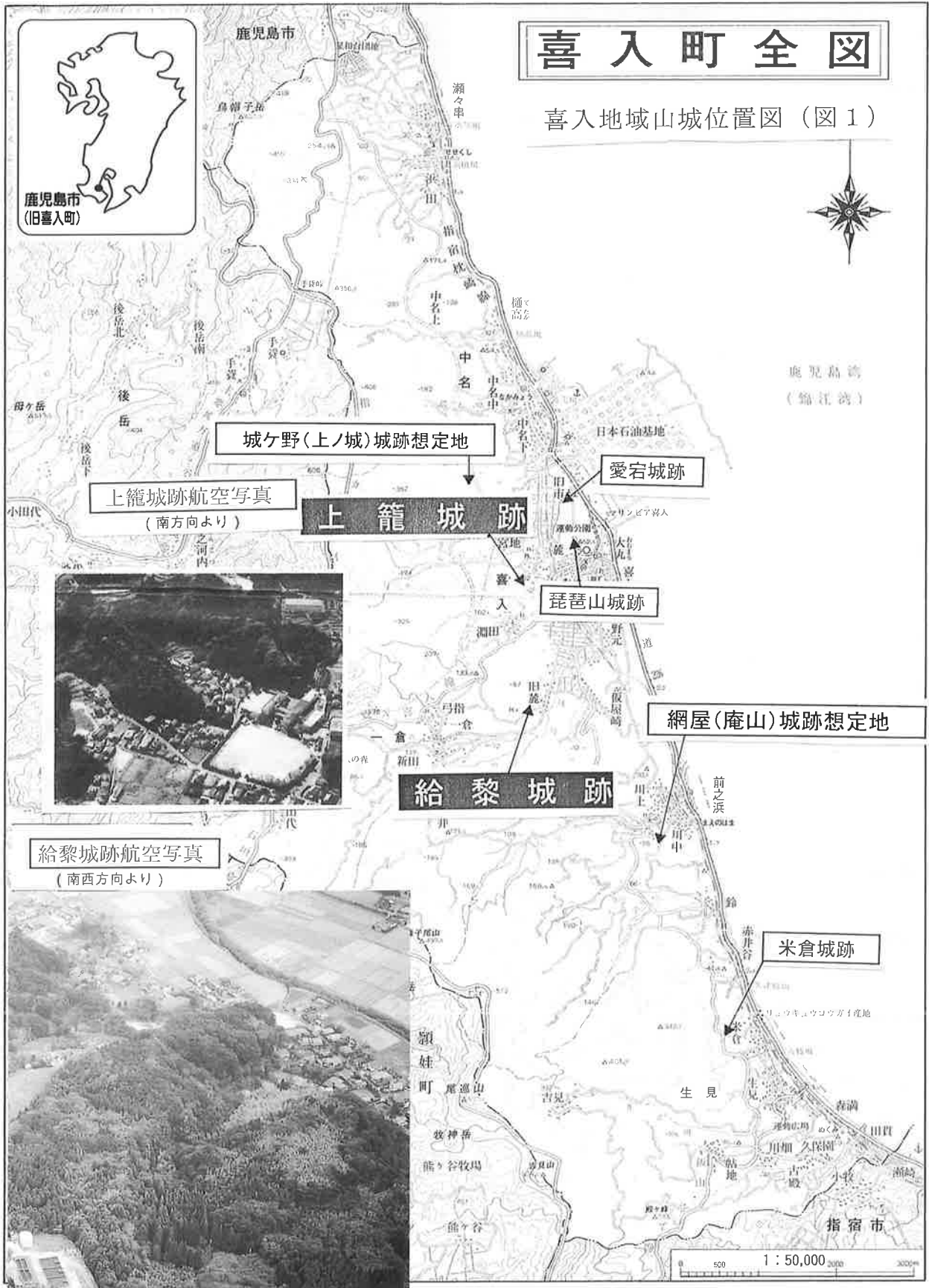


図1 旧喜入町主要中世城郭位置図

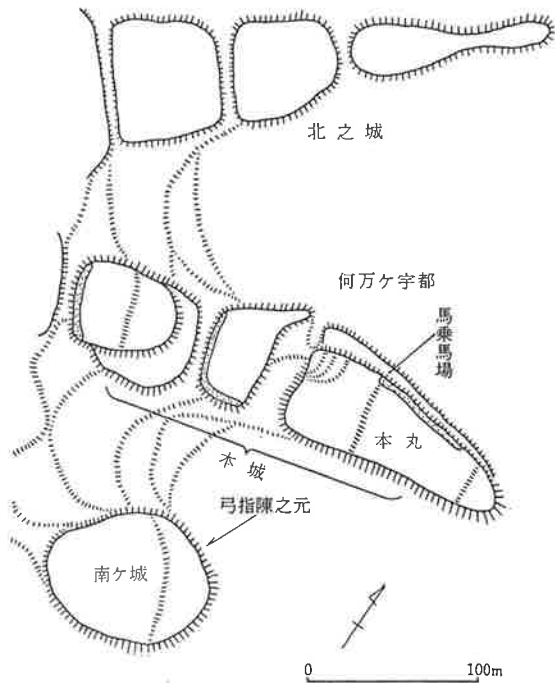


図2 給黎城要図(『日本城郭大系』第18巻新人物往来社1979年より転載)

太刀討ヶ迫(タチウチガサコ)、陣ノ尾(ジンノオ)、弓指(ユミサシ)、などである。

### 3 上籠城について

上籠城は、南北朝時代にすでに係争の地であったことが記録として残されている。

平成15年に宅地開発計画に伴い、喜入町に上籠城検討会が設置された。

それに伴い、遺構の存在の有無を知るために事前に、鹿児島国際大教授三木靖氏に依頼し、現地調査を実施して頂いたのが図3の上籠城の縄張り想定図である。

このことを踏まえ、平成16年に、喜入町教育委員会によって、国庫補助事業で確認調査が実施された。

確認調査の結果、開発区域外の台地と上籠城とを結ぶ鞍部に深くV字状にほりこまれた空堀が検出された。三木氏により、「防御の観点から、台地と、その突端部である山城との間に、人工的に鞍部をつくり、さらに深くほり込みをもうけ、6~8mもの崖面をつくり、



(平成16年10月8日撮影 上籠城空堀実測)

いざという時には、架けた橋を落とした。」とご教示していただいたとおりの遺構が存在した。

しかし、残念ながら開発予定区域内の上籠城遺跡は、切り立った狭い崖面であったため、表土層の下は、すぐにシラス土壌であり、遺物の包含層と遺構は検出されなかった。

表採品としては、弥生時代前期の土器の口縁部と、天目茶碗のかけら、茶をいれたとされる小器片が出土した。この小片だけでは、茶がいつの時期に喜入に伝わったのか特定は難しいが、すでに、喜入氏の五代喜入季久(摂津守)が、島津家の家老として元亀元年(1570)九月二十五日、細川藤孝(幽斎)を介して、將軍足利義昭に謁見している。

これは島津義久が守護大名の地位を、將軍家から認可を受けることを目的としていた。

いわば、季久が、島津家で、もっとも早く、都の文化に接した人物であり、また、細川家とも交流があったことから、茶の湯文化も、季久が島津に伝えたのではないかと、歴史的な想像が許されるのであれば、興味深い資料である。

### 4 おわりに

鹿児島には、自然地形を活かした中世山城が多く存在する。

その中で、実際の戦闘が行われた給黎城や

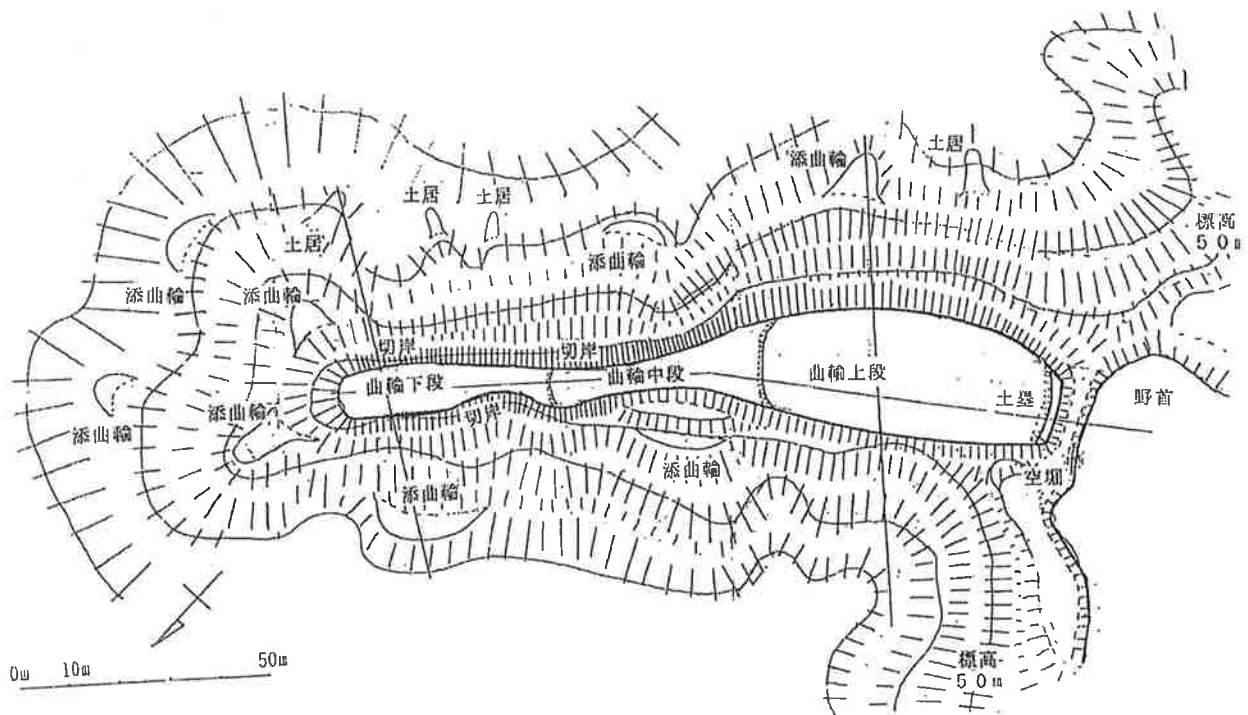


図3 上籠城跡縄張図

防御的機能を備えた上籠城の存在は、戦国時代の様相を知る上で意味があるのではないだろうか。

また、城に関連する字名も残っていることに喜入の歴史を感じさせる。

なお、喜入地域の山城に関しては、多くのことを鹿児島国際大学の三木靖教授にご教示いただいた。上籠城の遺物については、同大学の上村俊雄教授と、坊津歴史資料館学芸員の橋口亘氏にご教示いただいた。記して感謝したい。

(註1)

喜入小学校の後背地の台地は、南北に長く、その形が琵琶に似ているので、この名がある。明治43年(1910)に、当時喜入小学校の教員山口静吾氏によって、発見され、牧野富太郎博士によって銘々されたキレツチトリモチの生育地である。

(註2)

かつて、三木靖氏の指導で、地元の人案内で、給黎城の本郭部分に登ったことがあったが、本郭部分は竹に覆われていたが平坦で、一部に空堀や土塁等の遺

構が残されていることが確認された。その際、三木氏によって小規模ではあるが、給黎城は山城としての機能的な城であるとの評価を受けた。なお、給黎城は縄張り図作成等の調査は実施されていない。

【参考文献】

『喜入町郷土誌』 増補改訂版 2005

鹿児島県内城郭関連発掘調査報告書情報  
(2005~2006)

- 始良町教育委員会編2005『建昌城跡』  
始良町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
- 志布志町教育委員会編2005『志布志城跡』  
(内城跡・松尾城跡・高城跡・新城跡)  
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 輝北町教育委員会編2005『新田遺跡・吉元遺跡』  
輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 大口市教育委員会編2006『関白陣跡・里町遺跡』  
大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(26)
- 知覧町教育委員会編2006『知覧城跡(三)』  
知覧埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
- 大崎町教育委員会編2006『金丸城跡』  
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 鹿児島市教育委員会編2006『地頭仮屋跡』  
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(44)

## 第26回 見学会・例会についてのお知らせ

○見学会 日 時：5月28日(日) 午前10時～12時  
集合場所：いちき串木野市役所前（旧串木野市役所前）  
見学場所：串木野城跡・梶城跡

○例会 日 時：5月28日(日) 午後1時30分～3時30分  
会 場：いちきアクアホール  
（旧市来町湊町3126番地／TEL0996-21-5800）

■問い合わせ先 南九州城郭談話会事務局（下鶴）TEL0995-65-1553

### （事務局より）

平成7年12月3日に大口市関白陣を皮切りに発足した南九州城郭談話会ですが、始良町にある島津義弘陣の地、岩剣城跡で開催された第2回目から、午前中は見学会、午後から例会といったスタイルが定着し、以来11年間、ミュージアム知覧に事務局を置き、活動を展開して参りました。

このたび、始良町歴史民俗資料館に事務局を移し、事務局長を下鶴弘会員に引き受けていただくことになりました。長い間御協力ありがとうございました。併せて、会報『南九州の城郭』を発足当時から編集してきました霧島市（旧隼人町）教育委員会の重久淳一会員も交代します。新体制の下、これまで以上に、御支援・御協力のほどをよろしくお願い申し上げます。（上田 耕）

### （新役員体制）

会 長	三 木 靖
副 会 長	北 郷 泰 道
顧 問	五 味 克 夫
事 務 局 長	下 鶴 弘
会 計	有 川 孝 行
会 報 編 集	坂 元 恒 太
機 関 誌 編 集	吉 本 明 弘
ホ ー ム ペ ー ジ	川 元 茂 信
幹 事	出 口 浩・新 東 晃一 桑 畑 光博・吉 本 正典 岡 本 武 憲・鶴 嶋 俊彦 重 久 淳 一・上 田 耕 福 永 裕 暁・橋 口 亘
監 査	徳 永 和 喜・成 尾 英 仁

### 編 集 後 記

◆今回から、編集を担当させていただくことになりました。大役が果たせるか不安ですが、皆様の御指導・御協力をよろしくお願いいたします。

【原稿送付先】〒897-0302

鹿児島県川辺郡知覧町郡17880番地

ミュージアム知覧気付 坂元 恒太

### 南九州の城郭 第24号

発行者 三 木 靖

発行所 鹿児島県始良郡始良町東餅田498番地  
始良町歴史民俗資料館内 下鶴弘気付  
南九州城郭談話会

（振替口座02040-6-7850）

入会金500円 年会費2,000円

編集者 坂 元 恒 太

印刷所 (株) 朝 日 印 刷

<http://www.satsuma.ne.jp/myhome/kawamoto/danwa.html>